

志度寺の「当願暮当之縁起」について

長谷川 隆*

Togamboto no Engi of Shidoji Temple

Takashi HASEGAWA

概 要

志度寺の「当願暮当之縁起」は、当願という獺師が蛇に変身する物語である。民間説話としても香川県内に広く語り継がれてきている。ここでは、民間説話やグリム童話等との比較を通して、当願と暮当という二人の獺師の関わり方や影との対決という点でユニークな側面を持つ縁起であることを論じる。

キーワード：縁起、民間説話、蛇、影

1. はじめに

今から20年以上も前のことになるが、「当願暮頭」という能を高松で観たことがある¹⁾。香川県に關係のある能であり、室町時代末期に廃絶していたのを、西野春雄氏が復活したものである。この「当願暮頭」という変わった題名は兄弟の獺師の名前である。

能は、弟の当願がいつものように獺に出、兄の暮頭は、志深く、志度寺²⁾の法華八講を聴きに行くというところから始まる。その暮頭が、説経を聴いている間に生きながら蛇に変身してしまい、満濃池³⁾に入る。当願が満濃池に行き「祈誓」すると、蛇体の暮頭が現れ、当願に自分の眼を宝珠と言って渡し、波間に消える。

不思議に思ったことがある。法華八講を聴いた暮頭の方がなぜ蛇にならなければならなかったのか、罪深

さという点では、獺に出た当願の方ではないか、ということである。また、当願暮頭といういかにも仏教的な題名も印象に残った。後に、「当願暮頭」が志度寺縁起を元にした能であることを知った。また、民間説話として香川県内に広く語り継がれてきており、きわめてユニークな一面を持つこともわかってきた。

この論文では、志度寺縁起中の「当願暮当之縁起」について、民間説話等との比較を通しその文芸的達成度を考察したい。管見するところ、従来、この面からの研究が十分なされてはいないと感じたためである。なお、縁起や民間説話のほとんどでは、「暮頭」を「暮当」にしているため、以降、「暮当」と表記する。

2. 志度寺縁起中の「当願暮当之縁起」

志度寺縁起は鎌倉時代末に成立したと考えられており⁴⁾、7巻ある。その一つに、「当願暮當之縁起」(原文の表記)があり、その内容を香川叢書掲載の志度寺蔵古巻子本によって見てみたい。なお、「當」は「当」の旧字体であり、新字体で表記すれば、「当願暮当」にな

* 香川高等専門学校高松キャンパス一般教育科名誉教授

る。以下、引用部分以外は新字体で表記することとする。

桓武天皇の延暦年間、「白杖童子」という者が、冥土から蘇生し、荒れ果てていた志度道場を修復した(志度寺縁起中の「白杖童子縁起」)。その頃、「当願暮當」という「二人の獵師」がいて「心をひとつにし軀を同して」山野で狩りをして暮らしを立てていた。その当願が志度道場供養にまいった。しかし、当願は「今日暮當は山に入て狩す覧こと見か如く心に浮て、伴はさり思つことを悔て更に見佛聞法の心さしをわすれ」てしまう。供養が終わり参詣者が帰ってしまったも、「此當願心神にはかに涓然(けんぜん)として、進退更に辨(わきまへ)かたかりければ、家路を忘て薄暮に及まてに座をたつことを得なかつた。暮當が心配してやってくると、当願は「居長次第に高く成て身軀動熱して異氣甚あらく、その香、漸(やうやく)臭く、首より下が蛇となっていた。暮當は驚き、妻子に知らせるが、妻子は近づこうとしない。当願は暮當に「深き水の畔(ほとり)」に連れていってくれるように頼み、暮當は満濃池に連れて行く。「此時大蛇水上に浮て兩眼より涙をなかせ、我一生の罪業尤も重し、適(たまたま)會場に接(まじはる)といふ(へ)とも心根、猶、三寶に歸らざる故に、いきなから忽に大蛇の身と」なった。暮當は「多生曠劫(くわうごう)より機縁ふかき人」なので、自分の様子を見に来てほしいと頼む。二、三日して暮當が行くと、大蛇が現れ言う。「汝が思ふ(ひ)を報せんかために一眼を抜て與ふへし。是は如意寶珠也。これを愛用して財とせよと云。暮當か云、六根の缺ぬる者は成佛せずとなり。如何と大蛇云、汝甚愚なり。いまたしらすや。藥王はあたへ、雪山は鬼に身を投げ、薩埵は虎に身をほとこすといへとも皆是佛果を証」していると言って、すぐさま左の眼を抜いて暮當に与える。酒を作つて壺の底にこの宝珠を入れれば清酒となり、酒が尽きることはない、と言うのである。暮當がそのようにすると美酒ができ尽きることがなかつた。しかし、そのことを暮當の妻に知られ、「目代」に取り上げられ「御門」に献上される。さらに「一雙の玉なるへし」ということで右眼も取り上げられる。暮當は褒美を与えられるが固辞して去り「行方をしらす、是偏(ひとへ)に大蛇と深く契るむねありて也。」後、玉は一旦「龍宮」の「龍王」の手に渡るが、かろうじて取り返すことができ、宇佐八幡宮に奉納される。

能との相違点で気がつくことは、当願暮當が、能では兄弟の獵師としているのに対し、縁起では獵師仲間としていることである。しかし、本質的な違いではない。この「当願暮當」は香川県内に広く伝わる民間説話であるが、能と同様、兄弟としているものが多い。名前をつけず、単に兄弟の獵師とし、兄が蛇になる話にしているものがある⁵⁾。また、当願暮當という兄弟だが、蛇に変身する方を兄の当願としているものもある⁶⁾。さらには、蛇に変身する方を弟の暮當としているものもある⁷⁾。

重要な点は、殺生を職業としている、仲がよく性格も極めて似た二人の男という設定なのであり、そこに揺れはない。その点で、この「当願暮當」は、グリム童話の「二人兄弟」の系譜につながるものだという考えも成り立つであろう⁸⁾。このことについては後で論じたい。

当願暮當というユニークな獵師の名前には、縁起の作成者の意図がうかがえる。背後に民間説話の影響があることは否定できないが、あくまで縁起であり、志度寺の靈驗の由来を説く、物語的色彩の濃い、絵解きのために作られたことが考えられるのである⁹⁾。

「暮當」とは「暮れに当たる」ということであり、仏教の教えは残るが、修行も悟りも得られなくなる末法の世(末世)であることを示しているであろう。日本では永承7年(1052年)に末世に入ったとされている。また、「当願」とは「当(まさ)に願ふべし」ということである。当然仏に救いを願わなくてはならない、ということである。さらには「当願」が同音の「到岸」の意味を兼ねていることも考えられる。「到岸」とは、「到彼岸(とうひがん)の略で、「生死の海を越え涅槃(ねはん)の岸にいたる菩薩の修行のこと¹⁰⁾」である。末世において「到岸」を「当願」する獵師が、自分の「罪業」の重さに気づく。その内面的苦悩を大蛇への変身によって表現しているのである。

そして、そこには影の力があると考えられる。

3. 影について

河合隼雄氏の『影の現象学』によると「影」について次のような指摘がある¹¹⁾。

ある個人の心の中に生じる創造過程を簡単に記述してみると次のようになるだろう。まず、その人は新しい考えや知識の新しい組み合わせを試みるために、意識的努力を傾けるであろう。しかし、そのような試みがどうしても無駄だと解ったとき、そ

の人の意識的な集中力は衰えはじめ、むしろ外見的にはぼんやりとした状態となってくる。このとき、今まで自我によって使用されていた心的エネルギーが退行を生じ、それは無意識のほうに流れてゆく。このようなときは、その人は一種の混沌の状態を体験するわけであり、まったく馬鹿げた考えや、幼稚な思いつきや空想が心の中をよぎる。(中略)

ここに意識と無意識との対立が生じるがそれをそのまま長く耐えることが大切である。この対立関係を中心としながらも、無意識の力は相変わらずはたらき、様相を変化せしめたり、また新しい内容を出現せしめたりする。そのうちに、これらの対立を超える調和が発見され、対立する両者の片方が否定されることによる決定ではなく、両者を生かす形での統合の道がひらけてくる。ここに創造の秘密がある。このとき、今まで無意識内に逆流していたエネルギーは反転して自我のほうに流れはじめ、ここに再び力を得た自我は、新しい統合の道を現実とのかかわりのなかで堅めてゆくことになる。(中略)

創造過程に不可欠な影とはいったい何であろうか。影とはそもそも自我によって受け容れられなかったものである。それは悪と同義語ではない。特に個人的な影を問題にすると、それはその本人にとっては受け容れるのが辛いので、ほとんど悪と同等なほどに感じられているが、他人の目から見るとむしろ望ましいと感じられるものさえある。しかし、創造性の次元が深くなるにつれて、それに相応して影も深くなり、それは普遍的な影に近接し、悪の様相をおびてくる。かくて、「悪の体験なくしては自己実現はあり得ない」とさえいわねばならなくなってくる。

引用が長くなったが、影とは「自我によって受け容れられなかったもの」である。縁起においては、獵師としての生き方を否定するものと考えられる。そして、影との対決はしばしば蛇への変身という形で表現される。

有名な道成寺伝説においては、恋する男の裏切りにより、女が蛇体となり男が逃げ隠れた鐘にまわりついて焼き殺すことになる。影の力が強大な場合はこのように大きな破壊的エネルギーを持つのである。しかし、志度寺縁起においては影との対決は創造的方向に発現する。当願は大蛇に変身したものの、より深い洞察力と不可思議な能力を持つようになる。そして、暮当の存在も大きい。

大蛇の当願が一眼を抜いて暮当に与えようとする

と、暮当は「六根の缺める者は成佛せず」と断ろうとする。当願はそれを「愚」とし、「薩埵は虎に身をほとこすといへとも皆是佛果を証」すと左眼を抜いて渡すのである。

しかし、そこにある暮当の働きを忘れることはできない。縁起によると、妻子に見捨てられた大蛇に終始手を差し伸べるのは暮当である。そのおかげで暮当は尽きることのない酒を手に入れることができる。しかし、暮当の妻の裏切りにより、宝珠を失うと、褒美を断り身を隠すことになる。当願と暮当は一心同体であり、当願の運命は暮当の運命でもあった。このことを知っていた暮当の行動により、当願の能力が発揮できたのである。

このことを考える上で注目すべきは、先に触れたグリム童話の「二人兄弟」である。「二人兄弟」は双子の狩人の話である。弟の方が竜を退治したことによりお姫様のお婿さんになり、若い王様になる。ところが悪い魔女によって石にされる。それを知った瓜二つの兄が都にやってくる。

若いお妃は、てっきりじぶんの殿さまだと思いこんで、どうしてずっとお留守になさったの、とたずねました。兄さんのこたえるには、「なにしろ森のなかで道に迷ってどうしてもぬけだせなくてね」夜になって、兄さんは王さまのベッドへつれて行かれましたが、一本の両刃の剣をじぶんとお妃とのあいだにおいておきました。何のおまじないか、お妃にはわかりませんでしたけれど、とうとう聞きそびれてしまいました¹²⁾。

兄はこの後、魔女を倒し、弟を救うが、弟は兄が自分の妻と寝たことを知り、はげしい嫉妬心にかられる。しかし、妻の妃から一本の両刃の剣の話を知り、兄がいかに立派であったかを悟る。

一心同体とも言える二人がその関係を保つことのために難しいかを示す話である。縁起においても宝珠の代わりに与えられた褒美を断り姿を隠すという、暮当の厳しい決断が必要とされるのである。

逆の例が昔話の「歌い骸骨」(「踊る骸骨」)である¹³⁾。これも二人が主人公である。仲の良い友だち二人が出稼ぎに行き、帰りに一人がもう一人を殺して金を奪う。殺された方は骸骨となって復讐するという話である。類した話は世界各地に伝承されており、裏切る方がいかに楽な生き方かを示すものと言える。

縁起では、暮当の誠実な生き方が、蛇となった当願の創造性を支えていたと言えるのではなからうか。

4. 蛇について

蛇は民間説話においてしばしば登場してくる動物である。縁起においてもこのような民間説話の影響がいくつか見られる。ここでは、縁起と「蛇女房」との関係について見てみたい。香川県大川郡に伝わる「蛇の女房」によって内容を伝えると以下ようになる¹⁴⁾。

蛇を助けた若者の漁師のもとにきれいな娘が来て、女房となる。女房が赤ん坊を産む時、見るな言われるが男は見えてしまい、蛇であることを知る。女房は去るが、男に玉を渡し、子どもになめさせるように頼む。子どもはよく泣くが玉になめさせると不思議に泣きやむ。しかし、このことが殿様に知れ、取り上げられる。すると女房がもう一つ玉を渡し、これで両眼をあげたので目が見えなくなってしまった、朝晩がわかるように三井寺の鐘をついてほしいと頼む。

蛇は農業神であり、水の神でもある。「当願暮当」においても玉によって尽きることのない酒がもたらされる。「蛇女房」と「当願暮当」の間に何らかの関係性があることは疑いようがない。しかし、「蛇女房」においては子どもに対する蛇の母性的犠牲的行為がテーマであるのに対し、縁起は影との対決がテーマである。

5. 最後に

イタリア民話に「恐いものなしのジョヴァンニン」という話がある¹⁵⁾。恐いものが何もないので、恐いものなしのジョヴァンニンと呼ばれる若者が主人公である。そのジョヴァンニンが世界中を歩き回って、ある宿屋に泊まろうとしたところ、部屋がなく、宿の主人から、「誰でも恐くなってしまおう」ので生きて出てきた者がひとりもない屋敷を紹介される。そこで、ジョヴァンニンはその屋敷に泊まり、恐いものなしで大男と対決し、大金を手に入れる。しかし、その結末はこうである。「恐いものなしのジョヴァンニンは、あの金貨で大金持ちになり、仕合せにその屋敷で暮らした。そしてある日のこと、振り向きざまに、自分の影を見てひどく怯え、そのまま死んでしまった。」

光が強ければ強いほど影も濃くなる。若い間は、捨てるべきものが何もなく、恐いものなしであっても、年を重ね、大金持ちになると、自分の深い影に気づき、怯えるのである。ジョヴァンニンはそのまま死んでしまった。しかし、当願の場合は苦しみはしたが蛇になり、人々に救いをもたらした。弘法大師を育んだ讃岐の穏やかな風土が産んだ物語であるということもでき

るかも知れない。

【注】

- 1) 香川県民ホール玉藻能パンフレット (1993.1 公演)
- 2) 香川県さぬき市にある寺。四国八十八カ所 86番札所。
- 3) 香川県仲多度郡まんのう町にあるため池。
- 4) 新編香川叢書文藝篇 (香川県教育委員会編 1981.3)
- 5) 谷原博信『讃岐の昔話と寺社縁起』(P.135 昔話を語る会 2006.8)
- 6) 北条令子『さぬきのおもしろ伝説水の巻』(松林社)、岸上真士編『総集編ぶらり讃岐の民話とむかし話』(岸上企画出版社 1992.4)
- 7) 武田明編『讃岐の民話』(新版日本の民話 5 未来社 2015.5)
- 8) 河合隼雄『昔話の深層—ユング心理学とグリム童話—』(講談社+α文庫 1994.2)
- 9) 国立劇場能楽堂調査養成課編『能と縁起物』(日本芸術文化振興会 1991.11)
- 10) 日本国語大辞典 (小学館)
- 11) 河合隼雄『影の現象学』(講談社学術文庫 1987.12)
- 12) 河合隼雄『昔話の深層—ユング心理学とグリム童話—』(p.342 講談社+α文庫 1994.2)
- 13) 稲田浩二・稲田和子編『新版日本昔話ハンドブック』(三省堂 2010.6)
- 14) 武田明編『讃岐の民話』(新版日本の民話 5 未来社 2015.5)
- 15) カルヴィーノ『イタリア民話集 (上)』(編訳河島英昭 岩波文庫 1984.8)